

The Story of
邪悪にして悪辣なる
地下帝国物語

Evil and Unscrupulous Underground Empire

Hideki Uryu

雨竜秀樹

シア

かん きん
山賊に監禁されていたところを、
アルアーク達に助けられた。

フランディアル

フェーリアン王国の姫。
けん ぼん じやう ぎやう
権謀術数に長け、
アルアーク達と同盟を結ぶ。

プルック

ゴブリンの長。
冒険者から襲われている
ところを助けられ、
兄妹に忠誠を誓う。

ハルヴァー・アベル・
アルティムア

アルアークの妹。
絶大な魔力を持つ、
地下迷宮の支配者の一人。
兄を狂信的に崇拝している。

デリト

地下迷宮に囚われた
女冒険者達を救うため、
アルアーク達と契約を結ぶ。

アルアーク・アベル・
アルティムア

滅亡した魔法帝国の皇子。
妹とともに、地下迷宮の化身となり、
侵略国への復讐を企む。

テルキス

別次元の世界から召喚された、
こん へきフルブレッドメイル
紺碧の全身鎧を
身に纏う最強の騎士。

プロローグ

星々が輝く夜空の下。

都市からだいぶ離れた森の中に、彼らはいた。

男が一人、女が三人の計四人。

「それではフランディアル姫、契約の宣誓を！」

邪悪な笑みを浮かべながら声を上げたのは十代半ばの娘だ。

ため息が出るほどの美貌の持ち主である。足元まで伸びたストレートの黒髪は絡まることなく綺麗に流され、シミひとつない白い肌は、触れれば雪のように溶けてしまいそうだ。

蒼い瞳は、星々の光を呑み込んだサファイアのような美しい輝きを放っており、人間はもちろん、エルフやドワーフなどの異種族をも魅了するに違いない。

唯一の欠点は少しばかり控えめな胸であるが、それもひとつのチャームポイントと言っていいいかもしれない。

夜闇に溶けこみそうな黒の法衣には、銀糸で不思議な紋様が刻まれている。

彼女を見た多くの者が抱く第一印象は、気まぐれで残忍な闇夜の女神、あるいは聖職者を墮落させる美貌を持つ女悪魔であろう。

彼女の声を合図に、深紅のドレスを纏った少女が自らの名と契約内容をスラスラと暗唱する。

「フランディアル・フィー・フェーリアンの名において、我が国フェーリアン王国の地下を……、貴方がた兄妹の領地として認めます。代わりに、我が国に巢食う聖王国の人間を追いだし、他国や妖魔の脅威からお守りください」

後ろでひとつに結んだ赤い髪に赤茶の瞳。妖精のように整った顔立ちで、深紅のドレスは白い肌によく映える。黒髪の美少女と違い胸の発育は良く、ドレスの胸元に飾られた大粒のダイヤが宝箱の錠前のように豊満な胸を隠している。

「この誓約が果たされるならば、私は魔法帝国の皇子アルーク・アベル・アルティムア様に身も心も、すべてを捧げ、聖王国と連合諸国すべてを滅ぼすことに協力すると誓います」

「問題ない」

フランディアルの宣誓を聞き、その場にいた唯一の男が重々しく答える。

短いが力強い答えだ。

端正な顔立ちで背はすらりと高い。暗闇にも映える黄金色の髪に、深く蒼い瞳。その顔の作りはどことなく黒髪の美少女に似ている。だが、表情は硬く口調もぶっきらぼうなため、紳士というよりは武人といった印象を受ける。

「ハルヴァーも構わないな？」

「うん！ 問題ないよ。兄様！」

さきの黒髪の美少女、ハルヴァーが楽しそうに頷く。

そして、アルークは最後の一人に話しかける。

「シア、今の言葉聞こえたな？」

「……はい。確かに聞きました」

どこか厭世的な雰囲気を持つシアと呼ばれた少女は、小さな声を出して首を縦に振った。

彼女は一人だけ背が低く、年も一番下である。

肩の辺りで適当に切った黒髪。どんより淀んだ金色の瞳は、一度見たら忘れられない不気味な輝きを放っている。着ている黒衣は、サイズが合っていないらしくブカブカだった。

「では……、始めようか」

「うん。兄様！ 私達の復讐を始めましょう！ 魔法帝国は滅びたけど、その遺志はまだ失われていない。憎き聖王国と連合諸国に同じ苦しみを!! 兵をもつて蹂躪し、煉獄の炎をもつて焼き尽くそう! アハ、アハハハハ! 五年もかかったけど、ようやく私達は最初の一步を踏み出せるね! 兄様!!」

無表情で淡々と語る兄に対し、妹は邪悪な笑みを浮かべて陽気に、歌うように声を響かせる。

「復讐」という言葉を使った時、アルークとハルヴァーの蒼い瞳に憎悪の炎が宿ったのを、シア



は見逃さなかった。

「――転移、地下迷宮の宝珠!!」

ハルヴァーは魔法の呪文を唱え、白と黒の色が混ざり合った拳大の宝珠を呼び出す。

宝珠から溢れる魔力の波動を感じとり、フランディアルは背筋を震わせ、シアも底の見えない沼のような目で食い入らんばかりに宝珠を見つめた。

「さあ、兄様!」

「ああ」

兄妹が宝珠に手をかざす。

すると溢れ出す魔力が強まり、兄妹の手をジュツと焼くが、二人とも表情を曇らせるどころか痛みを漏らすこともない。その代わりに、お互い軽く首を縦に振ると、魔法の言葉を紡ぐ。

「私達の復讐を……叶えるために」

二人の声が夜闇に響き渡る。

「――創造、邪悪にして悪辣なる地下帝国!!」

そして、彼らの復讐の物語が幕を上げる――。

第一章 地下迷宮の支配者と最初の冒険者

アルティムニア帝国、通称——魔法帝国。

通称の通り、この帝国は魔法に支えられ、魔法を使える人間達が貴族として君臨し、広大な領地を支配していた。

魔法。

世界の法則を捻じ曲げて、術者の望む結果を生み出す力である。

万能ではないが、便利なものであった。

魔法帝国は、妖術、死霊術、錬金術、召喚術、付与術、幻術、魔女術、悪魔術という八体系に魔法を分類し、そのすべてを合わせて、魔法と呼んだ。

帝国は熱心に研究と開発を行い、全盛期には実に数千以上の魔法を生み出した。

建国から五百年、魔法帝国は常に豊かであった。

その理由は魔法に加えて、もうひとつ。

この世界に存在する人間以外の知的種族を、大々的に受け入れたためである。

周辺諸国も、エルフやドワーフなど人間以上の力を持つ種族が治める国に対しては敵対的な態度

は取らなかつた。だが、ゴブリンをはじめオーク、オーガ、ミノタウロス、ケンタウロス、獣人などの種族については、妖魔として蔑み、害獣のように扱っている。

妖魔達は部族単位で暮らしており、国を作るほどの組織力はない。各国は彼らを混沌に属する者とみなし、集落を見つければ交渉することもなく一方的に焼き討ちして、蹂躪した。

財宝を奪い、奴隷として生かすか獣として殺し、彼らの領土を奪う。彼らが何もしなくてもである。

それゆえ妖魔は人間を敵視し、今度は逆に小さな村々を襲う。

世界はそんな負の連鎖を繰り返していたが、魔法帝国では妖魔達を人間と同じように扱った。もちろん、特別扱いはいらない。彼らから攻撃を受ければ反撃を行ったりもした。だが、問答無用で排除するようなことはしなかつた。長い時間をかけて友好関係を築き、妖魔達と共存してきたのである。

しかしその行動は、聖王国をはじめとする連合諸国からの孤立を招いた。

力のない小国のいくつかは秘かに魔法帝国を支持していたが、人間の国々の中でも最も強大な軍事力を誇る聖王国は、魔法帝国を大陸に暮らす人間すべての敵と宣言。

聖戦として、魔法帝国を滅ぼすように連合諸国に働きかけた。

聖王国の主張に賛同する民衆に押された国、魔法帝国の富に目が眩んだ国、妖魔との共生を拒絶する国内の反抗勢力など、それぞれ思惑は違ったが、魔法帝国を滅ぼすという点で一致団結した彼

らは、四方八方あらゆる方面から、さらには内部からも攻撃を仕掛けた。

そうして建国から五百年の歴史を誇った巨大な魔法帝国は、わずか一年で滅ぼされてしまったのである。

皇帝をはじめ、魔法帝国の重鎮、兵も民もみなすべて無残に殺された。

帝都を含め、二十以上もの名だたる大都市は破壊され、実に六百万人以上の魔法帝国民が虐殺され、百万人もの民が奴隷とされた。魔法帝国に協力した妖魔達も同じように駆逐され、魔法帝国全土は血で染まったのである。

それが五年前。世にいうアルティムア聖征戦争である。

以来、大同士の大きな戦いも起きていない。

だが、帝国の滅亡により勢力を強めた大国は、それぞれのやり方で、次なる野心の牙を力無き小国へと向け始めた。

圧倒的な軍勢で蹂躪したり、指導者を傀儡にしたりなど、国によってその支配方法は多岐にわたったが、支配された国は皆一方的に搾取されるという末路を辿った。

明日、食べる物に事欠くほどの過酷な税金。

反抗する小さな村があれば、大国の騎士や傭兵達が野盗のごとく襲撃し、男を殺し、女を犯し、子供を奴隷商人に売り払う。

世界は荒みきっていた。

* * *

森が燃えていた。

燃える森には、耳をつんざくような悲鳴が響き渡っている。

ゴブリンの集落を制圧した兵士達は、生き残りの妖魔達を皆殺しにして、金や銀、宝石、麦、家畜、酒、蜜蝋、獣の皮など価値ある物を根こそぎ奪い、その他の、たとえばゴブリンの家屋やキノコの栽培所など、自分達に価値のないものはすべて焼き払っていた。

その凄惨な殺戮の様子を見つめている二人の騎士がいた。

一人は二十代半ばの若い騎士で、聖王国貴族の特徴である銀髪銀目をしており、顔立ちもどこか品がある。対してもう一人は、三十代半ばの壮年の騎士だった。どこの出身でも珍しくない茶色の髪に黒い目。立派にカットされた髭は威厳を保つためにも見えるが、むしろ男の軽薄な内面を映しているようにも見えた。

「いやはや……さすがは聖王国の騎士様です！ 迅速で的確な指示、訓練された精鋭と……、我らフェーリアン王国の兵は出番がありませんでしたなあ。いや、このジャール、感服いたしました」

自分より十以上も年下の人間に向けているとは思えないほど媚びた口調で話す壮年の騎士。

だが、世辞^{せじ}は聞き飽きているといった態度で、若い騎士はつまらなそうに鼻をならす。

「ふん、ジャール。出番ならあるぞ……。略奪品^{りゃくだつ}を運ぶという雑用がな」

「は、はあ！ ただちに！」

ジャールは大きさに一礼して、部下達に略奪品^{りゃくだつ}を運ぶように命令する。

(……ふん、聖王国の青二才が……お前も運べよ)

と心の中で舌打ちしたが、もちろん表情にはおくびにも出さない。

そこへ、聖王国の騎士の補佐官がやってきて敬礼する。

「ルクス様、集落内の妖魔^{せうめつ}達はすべて殲滅^{せんめつ}いたしました」

バケツをひっくり返したような兜^{かぶと}を被った補佐官が報告した。華奢^{きゃしゃ}であり、戦いに向いているとは思えないが、手にした斧槍^{ハルバード}は血で染まっており、鎧^{よろい}は返り血を浴びていた。

「ご苦労」

「では、逃亡した妖魔達の追撃^{ついげき}に移りたいと思いますが……」

血気に逸^はる補佐官に、聖王国の騎士——ルクスは首を横に振って即答する。

「いや、その必要はない。今、冒険者達を向かわせたところだ」

「で、ですが……」

ルクスは、異論を述べようとする補佐官に有無を言わせぬ一瞥^{いちべつ}を向ける。

「も、申し訳ございません！」

敬礼する補佐官からルクスはつまらなそうに目をそらす。

(ある程度は生き残ってもらわなくてはな……)

ゴブリンの繁殖力は高い。

ある程度の数が生き残れば、再び集落を作り、財宝を集めてくれることだろう。そしてまた、時機を見て刈り取ればいいのだ。

「こちらの損害は？」

「は、はい。死者六名、負傷者は約三十名、その内重傷者は五名、以上です」

「ゴ布林相手に不覚をとったのか？」

ルクスは眉間^{みけん}にしわを寄せる。その表情を見て、報告をした補佐官は慌てて付け加える。

「い、いえ、相手はゴ布林ではなくオーガです。冒険者があらかた掃討^{そうたう}しましたが、生き残りがおりまして……」

ゴ布林とオーガでは実力が違いすぎる。オーガは一体で、人間の騎士五、六人分の戦闘能力があるのだ。

「なるほど……」

無論、戦場に身を置く以上、死はいつ降りかかってきてもおかしくはない。だが、どのような場合でも部下の死は指揮官の責任である。たとえばこの場合、部下六名の死は、ルクスの責任になる。殉職した兵に対する責任の取り方はさまざまあった。

死んだ部下の家族に補償^{ほしょう}を行ったり、今回の失敗を教訓とした戦略の始末書を提出したりなどである。甚大な被害を出した時には指揮官から外されたりするし、時には一平卒からやり直すことも、責任の取り方のひとつだ。どれが正しいという明確な基準はないが、少なくとも部下の死を悼^{いた}み、自分なりの身の処し方を決めるのが指揮官としての最低限の資質と考えられている。

そういう意味で、ルクスはその資質を備えていなかった。
「死亡した兵の六名は軍籍から名を抹消せよ」

「そ、そんな！」

「この作戦の前に兵の任を解かれていたことにするのだ」

ルクスは冷たく言い放つ。

聖王国には、死傷した兵に一定の補償を与える制度がある。

残された家族にはそれなりの金品が支払われ、場合によっては一定期間の税^{めんぎょ}が免除される。そのため、兵士達は国を信頼し必死に戦うのである。

「ルクス様！　どうか考え直してください！」

「バカめ、大声を出すな！」

銀目に冷たい光を宿して、ルクスは補佐官を一喝する。

「いいか、たかがゴブリンの集落^{つぼ}を潰すのに死者を出したなどと本国に知れたら、いい笑いものだ。お前は、黙って命令に従っていけばよい」

「……」

「ソフィ補佐官、お前の家は我が家に代々仕えているのだろう？　生家の期待を裏切るのか？」

補佐官は体をびくりと震わせ、唇^{くちびる}を噛みしめる。動かない補佐官を見て、ルクスは大きくため息をついて吐き捨てるように言った。

「所詮^{しよせん}、女ということか……、もういい、下がれ。私がやる」

「お、お待ちください!!」

兜を外して、補佐官は素顔^{むろ}を曝す。

薄い金色の髪と目を持つ、十代半ばの愛らしい顔立ちの娘である。頬^ほは上気し目は涙でにじんでいるが、上官の顔をしっかりと見据えていた。

「オーツ、ベルフォード、バレン、クロスト、フェルフェント、ボルド……」

「？」

「死んだ者達の名です。彼らは平民でしたが、聖王国の理想のため、この地に派遣^{はけん}されました。そんな彼らの名誉をかき消してしまうようなマネをしていいのでしょうか？　どうか、御再考ください！」

聖王国の騎士は青臭い言葉に顔をしかめる。だが、間の悪いことに、部下達がソフィの大きな声を聞き集まって来た。このまま喋^{しゃべ}らせれば、いったい何をまくしたてるか。ルクスは舌打ちをして、ソフィに言う。

「わかった。ソフィ補佐官。私が間違っていた。貴公の意見を受け入れよう」

「ほ、本当ですか！」

「ああ、さすがは聖剣を託された一族の出だ。目が覚めたよ」

心にもない言葉で補佐官を納得させると、ルクスはソフィに兜を被るよう促した。安堵したのか、ソフィはバケツ兜を被り直す。

（まったく、父上も面倒な奴を補佐官に付けてくれたものだ……）

そう心の中で毒づくと、今後の計略に思いを巡らせた。

（さて、この国を聖王国の傀儡にするためにもう一働きするか）

すべてうまくいけば、ルクスは報酬としてフランディアル姫を手にすることができる。

（小国とはいえ、一国の姫君だ。そこらの女どもとは味も違うだろう）

邪な思いを抱きながら、彼はゴ布林達の財宝が運ばれていくのを眺めていた。

* * *

夜の森をかき分けて進むゴ布林、その数は約三十体。

近隣では最大級の八百体はいた集落の生き残りである。

彼らは必死に逃げていた。

族長のブルックは逃げながら何度も悪態をつく。

「くそ！ くそ！」

人間達の妖魔狩りはしばらくなかったため、油断していた。その隙について、彼らは攻めてきたのである。

後悔してもしきれない。

「急ぐぞ、グザーハ！！ とにかく、この場所から離れるんだ！！」

彼は後ろから付いてくる雌のゴ布林を必死に励まし、急いで夜の森を進む。

何があっても彼女を守らなくてはならない。

ゴ布林――。

雌雄ともに薄緑の肌をした醜い顔の小人である。知能は低く、集団で森や山、荒地などの辺境で原始的な暮らしを営んでいる。性格は臆病で卑屈だが、相手が弱ければ高圧的になる。

優れているところと言えば、繁殖力だろう。

ゴブリンの繁殖力は人型生物の中では群を抜いている。雌一胎が最低でも一回の出産で十体は生み、生まれた子供達は数か月で大人になる。

その代わり寿命も数年しかない。そもそも天寿をまっとうするゴ布林は少ない。生まれてすぐに死ぬ子もいるし、病で死ぬ者もいる。

また、ゴ布林はお世辞にも強いとは言えないため、訓練を受けた人間には敵わない。成人して

も、人間の子供と大差ない身長と筋力がなく、武器の扱いは粗雑である。

人間一人に対し、最低でも五体ほどで襲い掛からなくては勝てない。

そのため、強者と協力する方法を取る集団である。

ブルックの集落も、オーガと呼ばれる強力な妖魔を護衛としていた。単独で人間の兵士の五、六人を倒せる屈強なオーガが十数体、戦力としては十分に思えた。事実、何度か行われた襲撃では見事人間達を追い返すことに成功している。

ところが、今回は違った。

数十人の冒険者達が、息もつかせぬ間にオーガを血祭りにあげると、戦えるゴ布林達を的確に潰していった。そして、逃げ惑うゴ布林達にとどめを刺さんとして、白い鎧を着た兵士達がどつと押し寄せてきたのである。

冒険者と呼ばれる連中は、ピンからキリまでいるが、今回彼らを襲ったのは実戦経験の豊富な猛者達だろう。ほとんど抵抗すらできず、愛人のグザーハを連れて逃げるのが精一杯であった。

「ブルック！ 火よ！ 敵が近づいてくる!!」

「敵だ！」

「どうする!？」

グザーハとわずかに残った仲間達の言葉に、ブルックは我に返る。

確かに、自分達のほうに迫ってきている。

（倒せるか？）

ブルックはゴ布林の中では体格がよく腕に覚えもあった。グザーハは魔法が使え、その他の者達も錆びた剣や木の槍などで武装している。

（いや、無理だ）

相手が非武装の村人ならいざ知らず、戦える者の数も少ない上、腕利きの冒険者相手にゴ布林だけで戦うのは無謀すぎる。

ゴ布林は頭が良くないと言われているが、族長であるブルックは戦力比の計算程度はできる。

戦えば死ぬのは間違いない。

では、逃げ続けるべきだろうか？

しかし、自分はともかく雌達の体力は持たないだろう。自分が時間稼ぎをすれば、多少は生き延びられるかもしれないが、守る者がいなくなれば結局は追いつかれて殺されるだけだ。

「とは言っても、時間稼ぎ以外に良いアイディアもないしな」

右手に握りしめた武器を見つめる。

使い慣れた曲刀は逃げる時に戦った血がこびりついていた。鎧はボロボロだし、脇腹も切られている。グザーハ達のほうを向くと、みんな似たり寄ったりりの姿であった。

「グザーハ……、オレが食い止めているあいだに……」

皆を率いて逃げろ――。

そう言おうとしたところで、プルックの顔に蝙蝠がぶつかってきた。

「な、何だ!」

「蝙蝠の群れ……?」

「アツチだ!」

巢穴から飛び立つところなのだろうか、数百匹以上もの蝙蝠の群れが洞窟から一斉に飛び出した。

「洞窟? うまくすれば隠れてやり過ごせるかもしれないねエ!」

この辺りに洞窟があるとは知らなかったが、出てくる蝙蝠の数からすると、その規模は小さいものではないだろう。このまま、森を逃げ続けても、追いつかれるのは必至だ。ならば、洞窟に逃げ込むのも手かもしれない。外敵や住人が潜んでいる可能性もあり、危険な賭けかもしれないが。

プルックはすぐさま仲間達を引き連れて蝙蝠が飛び出してきた方角へ向かう。

「こ、こりや……」

入口は小さな割れ目を予想していた。

だが、小さいなんてとんでもなかった。

目の前には巨大な太古の城門を思わせる入口が聳え立っていた。門のいたるところには禍々しく神秘的な装飾が施されている。名のある偉人の墳墓か、古代の遺跡か。巨人や竜すら出入りできそう。そのうえ、暗闇の向こうには古いながらも地下に続く螺旋階段が覗いている。

「いったい……、いや! 迷っている場合じゃねエ、お前ら、入るぞ!!」
こんなものが集落の近くにあれば絶対に気づくはずだと首を傾げたが、追われているのを思い出すと急いで中に入って、螺旋階段を下りはじめる。ここまで来たら今さら引き返すことなどできない。

とにかく急がなくては!

階段を一気に下りる。

真つ暗だと思っていたが、火が灯っており、洞窟の内部は異様なほど明るい。

階段はかなり長く、走っても下に辿りつくまで十分以上はかかった。

「ハアハアハア……おい! みんな、大丈夫か!」

息を切らしながらプルックは周囲に呼びかける。

すぐに返事があった。

「いる! 大丈夫よ!」

「大丈夫! 全員ついてきた!」

グザーハや仲間達の言葉に、プルックは安堵する。

「よかった……、それにしても、思った以上に広いみただな?」

「ええ、隠れる場所には困らなそうね」

思わぬ幸運に感謝しながら、プルックは自然と頬をゆるませる。

こんな近くに絶好の隠れ家があったのだ。この場所を拠点にすれば、今回のような襲撃にも耐えられるかもしれない。喜びに胸の高鳴りを抑えられなかったが、次の瞬間、心臓が凍るほどの恐怖が駆け抜けた。

「ようこそ、私達の地下迷宮へ。歓迎するわ。ねえ、兄様？」

「……ああ」

「!!」

プルックだけではない。

グザーハ達からも、先ほどもであった安堵が一瞬で吹き飛んでしまった。

暗闇から突然二人の人間が現れたのだ。

男は魔法使いが纏うような金の刺繍が施された純白のローブに身を包んでいる。

女が着ているのは闇色のドレスだ。こちらは銀の刺繍がなされており、一流の服職人が仕立てたかのような見事な出来栄である。

彼らは、どちらも見た感じは人間だった。

だが、本能が警鐘を鳴らす。この二人は人間じゃない。人間の姿をした「別の何か」だ、と。強者を嗅ぎわかるプルックの勘がそう告げていた。

「オ、オレ達は……」

プルックは何か口にしようとするが、二人の放つ異様な威圧感を前に全身の震えを抑えられず、

言葉が続かない。男のほうは品定めするかのようにプルックを見つめ、女はニコニコと笑いながら話しかける。

「どうしたの？ 舌が回ってないよ、ゴ布林さん」

「追われて、逃げて……」

事情を説明しようとするが、言葉がうまく出てこない。

そんな様子を見て、男のほう口を開く。

「知っている」

無表情ながら、底知れぬ闇から響くような声だった。

怒気や苛立ちは感じなかったが、友好的とも判断できない。

人間達はゴ布林達を目の敵にしている。魔法帝国が滅びる前は、友好関係を築いたこともあったらしいが、少なくともプルックが生まれた時には既に敵であった。

「た、助けてくれ」

震える声で命乞いをする。

「どうか、コイツだけでも……」

せめて、グザーハだけでも逃がして欲しい。単純に、愛した雌を助きたい。プルックが今考えているのはそれだけであった。

醜く卑怯で、臆病者と蔑まれるゴ布林だが、愛する雌を助けたいと思う気持ちは、人間のもの

とそう変わらない。彼自身が気づいているかどうかはわからないが、少なくとも今の彼は、ゴブリンや人間といった種族とは関係なく、一人の男であった。

「……お願いだ」

祈るように、プルックは膝をついて頭を下げる。

だが、その言葉を嘲笑^{あざわら}うかのように少女が無情にも告げる。

「ふーん、アナタ達を助ける価値はある？」

「そ、それは……」

正直ない。

今自分達が持っているのは粗末^{そまつ}な武具とわずかばかりの食料だけだ。

もちろん、殺される覚えはない。だが、この遺跡^{いせき}が彼らのテリトリーならば、侵入者である自分達を手につかぬ理由もないだろう。

「ハルヴァー」

「ん、どうしたの兄様^{にいさま}」

「やめる」

短く、重く、冷たい言葉に、ハルヴァーと呼ばれた少女は可愛らしく首をかしげる。

青年の表情は動かない。ただ、深い蒼色の瞳の中にわずかながら憐み^{あわれ}に似た光が宿っている。

「わかりました。アルアークお兄様^{にいさま}。彼らの処分はおゆずりいたします」

美しい娘は足元まで届く黒髪を揺らしながら、極上の笑みを浮かべて優雅に頭を下げた。

アルアークと呼ばれた青年は妹を無視して、ゴブリンに問いかける。

「ゴブリンよ。名前を教えろ」

「へ、へい、プルックと言います」

「詳しく話を聞こう。助けて欲しいとは？」

「え？」

プルックは思わず顔をあげて、相手を見てしまう。

「ん？」

不思議そうな顔をしている青年。

「あれ？」

困惑し驚いた顔で兄の顔を見ている少女。

話がかみ合っていない。

真意を確認しようとハルヴァーが兄に尋ねる。

「兄様^{にいさま}、地下迷宮に侵入したゴブリンどもを殺しに来たんじゃないの？」

「いや、そんなつもりはない」

「あれ!? そうなの？」

「ああ、せっかく初めて地下迷宮に訪れた客人だ。顔を見ておこうと思ってな」

「なーんだ」

「ふむ、迷宮と一体化した状態でも以心伝心とはいかないようだな」

「みたいだねー」

両者の会話を聞きながら、プルックは心の中で安堵のため息をつく。

少しわからないところもあったが、どうやら問答無用で殺される心配はなさそうである。

「ああ、すまなかったな。別に危害を加えるつもりはない」

「だけど、調子に乗って地下迷宮を荒らしたりすれば、兄様が止めても殺すけどね」

今や穏やかな威厳をもって話す青年と軽やかに話しかける少女の姿は、最初の印象といささかギャップがある。

「さて、話を戻そうか、プルック」

「へ、へい！」

「この地下迷宮を荒らさないのならば危害は加えない。できれば、今すぐ外に出て行つて欲しいのだが？」

「そ、それだけかどうかご勘弁を！」

「ふむ……、事情があるようだな」

「はい、実は……」

プルックは今日起きた出来事を語った。

突然の襲撃による集落の壊滅、必死に逃げ延びた話、そして、追手から逃れるために偶然、地下迷宮を発見し足を踏み入れたこと。

同情を引くように細部で脚色したが、嘘は言っていない。

すべてを話し終えた後、アルアークは問うた。

「事情はわかった。……で、どうして欲しい？」

「あ、安全にここ以外の出口から脱出を……」

プルックの言葉を遮り、ハルヴァーが問いかける。

「本当にそれが望み？」

「ハルヴァー、余計な茶々を入れるな」

「でも兄様、この私達にお願いできる機会なんだよ？　せつかくのチャンスを手放させるのは可哀

想だと思うな」

そう口にしつつも、ハルヴァーの口調は猫がネズミをいたぶるようである。

「ねえねえ、プルック？　本当の望みを聞かせてよ」

「それはさっき言った通り……」

「本当に？　本当に？　いきなりすべてを奪われて、ただ逃げ回るのが、本当にアナタの望みな
の？　他のみんなも同じなの？」

その笑みはよりいっそう深くなっている。

いつの間にか音も立てずに近づいてきた少女は、足元まで届く長い黒髪を弄びながらプルックを見下ろしていた。深海の奥底のような蒼い眼が、ゴ布林達を睥睨する。

「……教えて、本当の望みを」

ハルヴァーが再びゆつくりと問う。

その言葉に、プルックは心の底から溢れ出すドス黒い憎悪の炎を抑えることができなかった。

「許せねえ……アイツら全員許せねえ!!」

「オレは……奪われた地を取り戻したい!!」

「死んだ仲間を弔ってやりたいし、仇も討ちたい!!」

プルックは叫んだ。

害虫のように殺されるのはイヤだ。

集落を潰されるのはまっぴらだ。

復讐を果たすだけの力が欲しい!

仲間達も同じように、怨嗟の言葉を漏らしていた。

その望みを聞き、ハルヴァーは満足したように頷く。

そして、晴れやかな笑みを浮かべ、青年に頭を下げて願いを述べる。

「お兄様、彼らの望みを叶えてあげてください。私からもお願いします」

「そうだな……」

アルアークは少し思案した後、ゴ布林達に告げる。

「……よからう。お前達を我が臣下として迎え入れよう。私達の言葉に従い、私達のために働き、私達のために戦うならば……、対価としてお前達の保護を約束しよう。そして、お前達の集落を襲った者達の復讐にも手を貸そう」

その言葉にハルヴァーが口を開く。

「さあ、兄様の慈悲を受け入れるならば手を取りなさい」

アルアークは手を差し出し、ハルヴァーはプルックに告げる。

ゴブリンの族長は、迷わずその手を取った。

水のような冷たさだったが、プルックの全身を駆け巡ったのは炎のような熱さである。

「私達の地下迷宮にようこそ」

「アナタ達を歓迎するね。けど、その前に……」

アルアークとハルヴァーは冷たい、邪悪な笑みを浮かべて呟いた。

「侵入者の排除が先だな」

「そうだね! 兄様!」

* * *

ゴブリンを追いかけている冒険者の一人が悪態をつく。

「くそ、逃げたゴブリンの搜索なんて貧乏くじもいいところだぜ！」

「だよなあ、ティレス。今頃、正規兵の奴らは集落の略奪品を物色しているはずだぜ？」

「最初にオーガどもをぶち殺して、突破口を開いたのはオレ達だつていうのによ！」

ティレスと呼ばれた男は、全身を守るフルプレートメイルと、使い古した剣と盾で武装しており、顔をすっぱり覆う兜の隙間から、ぬかりなく周囲を見回している。

一緒に愚痴^{ぐち}っている男も、同じような武装をした戦士だ。

彼らは「信仰の剣団」と呼ばれる、ティレスをリーダーにした十数人の冒険者チームである。

「それにしても、マジでデリトの野郎帰ったんですかね？」

「んなことあ、知らねえよ！　ったく、あの野郎スカしやがって……。『これ以上貴方達と組んでも、利益は得られなさそうです』だとお？」

ティレスは顔を怒りで真っ赤に染めて、離反した神官^{プリースト}に悪態をつく。
すぐにカツとなるところがこの男の欠点である。

「なんか、『鉄の戦乙女』って冒険者チームのほうに向かつていたなあ」

「イズレーンのところか？　まさか、戦闘中の『事故』を気にしたのか？」

そう言つて、ティレスはゴ布林達との戦いを思い出す。

ゴブリンの集落を襲撃している時、自分達より手柄を上げそうだった冒険者チーム「鉄の戦乙

女」を陥^{おとし}れようと、ゴブリンの一部を彼女達の後方に誘導したのである。

その結果、女の神官^{プリースト}と魔法使い^{ウィザード}の二人が大きな傷を負い、一番の手柄はティレス達「信仰の剣団」のモノとなった。もつとも、すぐに正規兵達が来て、せっかくの戦利品を奪われてしまったため、無意味に味方側の被害を出しただけである。

だが、ティレスは意にもかけていない。

（糞生意気な女どもに一泡吹かせてやったんだ。ざまあねえぜ）

しかし、デリトと呼ばれる人物はその行いに不満を抱いたらしい。

（なのにあの野郎、女なんかに尻尾^{しっぽ}を振りやがって、許せねえ……）

ティレスが「信仰の剣団」のリーダーをやっているのは、この冒険者チームで彼が一番強いからである。だが、強いだけではリーダーは務まらない。そのことを彼は理解していなかった。

「おい、ゴブリンの足跡を見つけたぜ！」

仲間の盗賊^{シニフ}が、逃げた妖魔の発見を知らせる。

「よし！　よくやった」

気分を紛らわすように、威勢のいい声を出して、ガチャガチャと鎧の音を立てながら、ティレスは前進を開始した。彼の仲間達もその後を追うが、彼らは自分達を尾行する者達の存在に気づいていなかった。

「信仰の剣団」の少し後ろをつけている者達は、小さな声で囁きあう。

「デリト、アンタの読み通りね」

短い赤髪に軽装の女、跳ねっ返り娘という言葉がピッタリとあてはまる感じである。

彼女の名はイズレーン。

「鉄の戦乙女」と呼ばれる冒険者チームのリーダーである。

「少しのあいだ一緒でしたが、すぐに底が見える男です。もう少し案内してもらったら、追い抜いてしまいましょう」

デリトと呼ばれた男が言う。

薄茶色の髪と目、少しばかり線の細い平凡な顔立ちの男である。着古した白色の法衣と首から下げた護符を見れば、彼が聖神教の神官であることがすぐにわかる。

傷や毒を癒す奇跡を使う彼らは、冒険者達の間で非常に重宝されている。だが、この男はそれ以外にもいろいろと目端が利くようである。

「追い抜ける？」

「彼らは皆、重装備です。人数も多いし、すぐに追い抜けますよ。問題はゴブリンの数が少ないので、あまりお金にならないところですかね」

デリトがそう告げると、イズレーンはニツと笑う。

「気にしないで。アイツらを少しでも悔しがらせることができるし、ゴブリンの指でも報酬がない

より全然マシよ」

「せめて、迷惑をかけた分は償わせてください」

「別に貴方のせいじゃないでしょ？ けどまあ、この冒険が終わるまでは、一緒にいてくれるとありがたいわ。ティレスのせいで、うちの神官と魔法使いが怪我しちゃったしね。まあ、貴方のおかげで死なずに済んだけど……」

ティレスの行った非道な小細工のせいで、イズレーンの仲間二人はゴブリンにかなりひどい手傷を負わされた。普段は、仲間の騎士が後衛の守りを行っているのだが、その騎士は数日前に慌てて「仕える主人に何かあった」と言って王都に戻ってしまっていた。

もしも、デリトが治癒の奇跡を施さなければ、取り返しのつかないことになっていたかもしれない。

（つたく、これだから器の小さい男は……）

荒事を生業とする冒険者の中で、女の冒険者となれば、いろいろとやかみを買うこともある。特に彼らのように同程度の実力の場合、男性冒険者チームからの嫉妬は尋常なものではない。

だが、負けてなるものかと、イズレーンは闘志を燃やす。ティレス達を出し抜いて、彼らの獲物を横取りしてやれば良い。

ゴブリンを殺して証拠の指を持っていけば報奨金が出るし、武器や防具をはぎ取って売れば多少の金になる。それでも、金銭的には報われないが、全くないよりはマシだ。冒険者達の収入は不安

定であるため、稼げる時に稼いでおかなくてはならない。

少なくとも、仕事を選び好みできるほどの余裕はない。

「それじゃあ、ローナ、ジェン！ こっちが先にゴブリンを倒して、報酬を頂くわよ」

イズレーンの言葉に、名前を呼ばれた二人の女性が応じる。

「わかった」

「おう！」

黒髪に青目の女狩人ローナ、金の髪と目を持ち赤銅色の肌をした筋肉質な女戦士ジェン。

イズレーンと同じく「鉄の戦乙女」のメンバーであり、どちらも並の男には負けない実力がある。

こうして、彼女達は「信仰の剣団」の後をつけていたものの、どちらの冒険者チームもすぐにゴブリンを追うのをやめ、予定を変更することになる。

その理由は突如として彼らの前に現れた、地下迷宮の入口のためであった。

* * *

まず最初に地下迷宮を見つけたのは「信仰の剣団」である。

巨大な地下迷宮の入口を発見し、彼らは戸惑いの声を上げた。

「おいおい、この辺りにこんなもんがあるって聞いてたか？」

「いや、そんな話は聞いてねえな」

「だけど、実際あるじゃねえか」

「ティレス、どうするよ？」

入口を前にして、ティレスは腕を組んだ。

ゴブリンの集落を攻める前に周辺を調べてはいたが、この場所についての情報はなかった。

名のある偉人の墳墓か、古代の遺跡だろう。

現在の技術では造るのが難しそうな、地下に降りる入口。

童や巨人すら出入りできそうな大きさに加えて、地下に降りる螺旋階段^{らせん}まである。

奥がどのようなになっているのかはわからないが、壁には燭台^{しよたい}があり、ロウソクの代わりに魔法による明かりが灯されている。

「こりや…、噂に聞く地下迷宮って奴じゃねえか？ だとしたら、すげえお宝が眠っているかもしれないねえぞ！」

ティレスの言葉に仲間達は同意するように首を縦に振る。

地下迷宮――。

遙か昔の強大な力を持つ魔法使い^{ウイザード}達は、地下に迷宮を創造して、その中にさまざまな財宝を隠したという。冒険者の間ではよくある噂話だ。財宝を守る魔物がいるらしいが、それを倒して手に入る財宝も莫大であり、発見者達は一生遊んで暮らせると言われている。

その地下迷宮らしき場所を見つけ、誰かがゴクリと喉を鳴らす。

「野郎ども行くぞ！」

ティレスは大声で仲間達に号令をかける。

決断の速さだけなら、ティレスはリーダーとしての資質は十分である。ただし、後先考えない無鉄砲な性格が災いして、これまで幾度となく仲間達を危険な目に遭わせてきた。そのことについて、本人は全く自覚を持ち合わせていなかったが……。

他のメンバーは異議を唱えなかった。逆らえば何をされるかわからなかったし、地下迷宮に財宝が眠るのなら見つけてみたいという気持ちも強かったからである。

「おっー」

リーダーの号令に応じて、「信仰の剣団」はガシャガシャと音を立てながら、地下迷宮を下りていった。

全員が地下迷宮に入ったのを見て、彼らを追跡していたデリトと「鉄の戦乙女」のメンバーは、どうしたものかと話し合う。

「地下迷宮……ですか、イズレーンさん達は何か知っていますか？」

「いいえ、情報屋はこんなのがあるなんて言っていないかったわ」

「こちらものです。しかし、これはいったい……」

イズレーンとデリトは考える。

こんな場所に、これほど巨大な地下迷宮の入口があれば、いくらなんでも誰か気づくはずである。少なくとも周辺地形を調べるために雇った情報屋が、気づかないのはおかしい。

安全を考えるならば、一度引き揚げるべきだ。

だが、冒険者という稼業をやっている人間なら誰でも知っている。安全ばかり考えていたら、チャンスは掴めないということを。

ここで引き返せば、絶対後悔する。

もちろん、チームのメンバーがいつもと大きく変わっている不安もある。

後衛を守る騎士の不在、神官プリーストと魔法使いウィザードの負傷、そして臨時で仲間になっている神官デリト。いつも通りの戦い方は期待できない。元々、ティレス達を出し抜くための追跡である。

とはいえ、もしここで臆病風おびひょうふうに吹かれて逃げ去り、ティレス達が多くの財宝を手に入れたという話を聞けば、後悔してもしきれないだろう。

「どうしますか？」

デリトが尋ねる。

「貴方はどうするの？」

「ご迷惑をかけた分の仕事はしますよ。地下迷宮に挑むならご一緒させていただきます。もちろん、私の助けがいらないというなら下がりますが……」

どこか試すように、デリトは答える。

「いいえ、癒しの奇跡が使える神官プリーストの助けは必要よ」

仲間を癒す力を持つ神官は、冒険者チームの生命線である。

それだけに、この男に自分達の命を預けて良いものか？ イズレーンは考える。

「……大丈夫だと思う」

リーダーの心を読んだように、狩人の娘がポツリと呟く。

「ローナ？」

「そんなに悪い人じゃない……、たぶん」

そして、言うべきことは言ったと再び黙り込んでしまう。

そんな仲間を見て苦笑すると、イズレーンはデリトに言う。

「地下迷宮を探索しましょう。見つけた宝は山分けでいいわね？」

未知の場所に向かう不安を拭い去ることはできなかったが、イズレーンは進むことを決断する。

その決断にデリトは頭を下げた。

「はい。問題ありません。それでは、改めてよろしくお願いします」

彼の返事を聞き、イズレーンは仲間達にも最後の確認を取る。

大抵の判断はリーダーである自分が決めて済ませてしまう。だが、この地下迷宮からはそこはかとなくイヤな雰囲気を感じてもいる。

「私がかまわない」

「お宝を手に入れて、待っている奴らを驚かせてやろうぜ」

ローナとジェンの同意も得て、イズレーンの腹は決まった。

「よし、行くわよ！」

こうして、「鉄の戦乙女」の面々も地下迷宮に挑むことになった。

* * *

ブルック達を安全な場所に移動させた後、アルアークとハルヴァーは地下迷宮の第七階「王の間」に向かう。

その名の通り、王が鎮座するのに相応しい空間である。

数百人程度なら余裕で収容できそうな広さに加えて、天上を支える柱には金や銀の装飾品が並んでいた。入口から玉座までは真紅の絨毯じゅうたんが敷かれ、床は水晶のように透き通ったタイルが張られている。

天井には無数の宝石がちりばめられたシャンデリアがあり、めくるめく極彩色ごくさいしきの輝きで室内を照らす。まるで王侯貴族の謁見えっけんの間まかダンスホールのように、この場所が地下であることを忘れてしまいそうなほどだ。